

オブセッションと自己譲渡の危機

—妄念に追い詰められていく人間像—

J. C. オーツ作 “Nobody Knows My Name”

“Where Are You Going, Where Have You Been?” を読む

稲 毛 理津子

“Nobody Knows My Name” はJoyce Carol Oatesの短編の中でも、とりわけ短いテキストではあるが、Ellen Datlowにより、1996年に、*Twists of Tale*という選集に収録されている。このタイトルは同名の歌のタイトルや、James Baldwinの作品名でもある。

「彼女はミステリ・ホラー・SFアンソロジーにも寄稿する、まさに境界線上の作家であると言える。日常生活をリアルに描きつつ、人間のグロテスクな内面を浮き彫りにするのだ」¹

と、彼女の著作のカテゴリーとして、ミステリ・ホラー・SFアンソロジーが指摘されるように、この作品をミステリ・ホラーの観点から解釈されることも多い。要因のひとつとして、主たる登場人物の物事の決定が、曖昧なままに唐突になされることがあげられよう。ミステリーは、

mystery: a story, a film / movie or a play in which crimes and strange events are only at the end / the quality of being difficult to understand or to explain, especially when this makes sb / sth seem interesting and exciting²

一部が隠されているものが、決定の狭間に潜り込むと思われ、結果として犯罪、事件が起こる、と定義される。

そこで、この決定の隙間の、obsessionと自己譲渡を中心に、考えたい。意識の狭間に（境目）に何かの強迫観念、妄念が瞬間進入して無抵抗になってしまふ、そのあたりを検討してみたい。

たとえば、Iris Murdoch は、*The Sovereignty of Good* (1970) の中でOatesの*The Hungry Ghosts*論で述べているように、人が物事を選択する際に心が

goodnessの方向に動くことがあるが、その瞬間に起こる、不可思議な空虚the strange emptiness which can often occurs at the moment of choosing³について言及しているが、オーツの登場人物たちは、物事を決定する場合に、ある概念に奪われて、といった意味で、they cannot think of anything else.⁴ある考えに囚われてしまい（obsession）、それ以外考えられずに魂を譲り渡すように思われる。そのことがunreal、「非現実感覚」を醸し出す一つの要因のように思われる。そこで、“Nobody Knows My Name”（1996）と“Where Are You Going, Where Have You Been?”（1970）について、obsessionと自己譲渡を中心に一つの解釈を加え、両作品に共通するAlice’s Adventures in Wonderlandの影響も考察したい。

1

今回取り上げる“Nobody Knows My Name”にはAlice’s Adventures in Wonderlandの影響力がオーツの意識に重なっているように思われる。

アリスも9歳、ジェシカ（Jessica）も9歳。子供にありがちな、どこか夢見がちで、時に乱暴で、時に冷徹で、自己を統制しきれないところがあるように考えられる。

ところで、オーツは、2003年度出版された*The Faith of a Writer*の中で、次のように述べている。

「作家生活における重要な影響として、2つあり、ひとつは早期の子供時代に受けたものと、成長して環境の影響と、芸術に感動するばかりでなく、適応行動が取れるようになってからのものとのである」⁵（著者訳）

続いて、What begins in childlike wonder and curiosity becomes, with the passage of time, if we persist in our devotion (or delusion), a “calling” ; a “profession”.⁶（子供のような驚きと好奇心で始まるものは、時の経過とともにもし我々がそれに傾倒し続けるなら、「天職」「職業（専門職）」となるものだ。）

その早期、子供時代のものとして『不思議の国のアリス』を、もう暗記するばかりでなく、骨の髄までしみこむほど、読み込んだと述べる。

In 1946, for my eighth birthday, my grandmother gave me a beautiful illustrated copy of Lewis Carroll's *Alice in Wonderland* and *Through the Looking-Glass*. ...My grandmother's gift with its handsome cloth cover embossed with bizarre creatures, and the perpetually astonished-looking Alice in their midst, would be the great treasure of my childhood, and *the most profound literary influence of my life*.⁷ (イタリック筆者)

この二百頁にも及ぶ、*The Faith of a Writer*の中に同様な言葉で『不思議の国のアリス』についていくつも言及されているのである。

この言葉を実証するかのよう、本稿で取り上げる“Nobody Knows My Name”（1996）には、Wonderlandのチェシャ猫のように、人間の言葉を話すかのように見える *thistledown cat* が出現する。その描写はたとえば次のように表現される。

The cat with *thistledown* gray fur like breath, staring at her, eyes tawny golden and unperturbed, out of the bed of crimson peonies.⁸ (265)

猫とジェシカの出会いは

The first time she'd seen the *thistledown* gray cat she'd been too surprised to call it, the cat had stared at her and she had stared at the cat, and it seemed to her that the cat had recognized her, or in any case it had moved its mouth in a silent miming of speech—not a “meow” as in a silly cartoon *but a human word*. But in the next instant the cat had disappeared so she'd stood alone on the terrace *feeling the sudden loss like breath sucked out of her* (266) (イタリック筆者)

というように、人間の言葉だった。この作品ではこのナンセンスも含まれているが、それが逆説的に、ジェシカという子供の分身、あるいは秘められた、抑えられた欲望の実現に手を貸す恐ろしい猫となる。ジェシカはまるで井戸の中に落ちたアリスのように、自己の想像と幻想の世界に生きているのである。

このように猫の存在はミステリアスで、たとえばポーの「黒猫」のように不吉で、超日常的な要素を人々の心のどこかに生じさせるようである。「恋人」に近い感覚から嵩じて危険な誘惑に満ちた存在「魔物」に至る。この

“Nobody Knows My Name”では、チェシャ猫に似たこの猫が、殺人を犯す。ジェシカがトランプの国ならぬこのAdirondack MountainsのLake St. Cloudで、王女となって「首を切っておしまい」と、言わんばかりに、猫が赤ん坊の口の上に乗し、窒息死させるのを傍観しているのである。現代版『不思議の国のアリス』である。けれども、この猫によって結果的には、アリスならぬジェシカには不思議の国から現実に戻り、罪を犯さなかったとはなり得ない。

オーツの他の作品の主人公、テッサもコニーもジェシカも他に理解できないような、夢見心地というか空想好きのところがある登場人物達である。アリスにも似ている。

『不思議の国のアリス』では、1864年に、白ウサギの後を追ってウサギ穴に落ちた当時9歳のアリス・リデルは、井戸に落ちてから、「私を食べなさい」と書かれた箱の中のケーキを食べて、大きくなったり、小さくなったりする。そして、周知のような冒険を経験していくのだが、中でも、チェシャ猫の出現がある。猫は暖炉の上に座っていたり、森の中の木の枝に座って、大きく口を開けてにやにやしていたりする。この猫は、姿を現したかと思うとまたどこかへいなくなってしまうて人をうろたえさせる癖があった。——ところがいつもの訳のわからない不思議の国の会話を交わしてから、チェシャ猫はアリスに帽子屋と3月ウサギの家のある方角を教えてくれた。このように、“Nobody Knows My Name”もアリスの幻想的な（ナンセンス）場面とも絡んでいる。たとえば、この物語の舞台になるAdirondack MountainsのLake St. Cloud（雲）という夏の別荘の名前にすでに、架空の世界を暗示するものを読み取れないだろうか。それに、dreamとrealityという単語が、この短編の中に5回も出てくる。このことは、オーツはこの作品を架空の夢の中の出来事として、設定したかったということを暗示している。また、

telling of how the roof of the house could be lifted and you could clime out using the clouds as stairs. (267)

家の屋根が飛ばされたり、雲の階段を使って登っていけることなどにもジェシカには、空想（imagination）癖から後述するような妄想癖（delusion, 根拠のない主観的な想像や信念、正しくない想念）があることが示唆される。それは、母親が

—and Mommy tried to keep her voice calm, saying Yes but every baby is different, and I'm different now, I'm more in love with —than ever with Jessie, God help me I think that's so. (275)

と父にささやくのを耳にしたことなどが大きな要因となり、母の愛が完全に自分から赤ん坊へと移行してしまったと嫉妬とねたみの妄想が作り出したものであり、そのobsessionに自己譲渡してしまってあかん坊の殺人という結果を生み出してしまったと解釈される。その経緯は次のようで、ジェシカが、赤ん坊（その名前すら覚えようとしない）のお守りを両親不在の折、初めて頼まれるが、いつもの猫が近づいて来て、赤ん坊の上に乗れり、息を吸い取ろうとする。

(suck vigorously at the baby's mouth, kneading and clawing at his small prey)

(279) 赤ん坊は必死で抵抗し、顔も赤いまだらの斑点まで出来るが、やがて蠟人形のように蒼白になり、丸い青い目は青黒くやがて焦点が合わなくなるが、その時双眼鏡で対岸を見ていたジェシカは、“No!—oh, no—” and the binoculars slipped from her fingers. As if this were a dream, her legs and arms were paralyzed. (279)

どうすることもできず、ただ手を拱いているだけである。

それは一見、事件であるが、ジェシカの赤ん坊への嫉妬とねたみの妄想が作り出し、赤ん坊の死の危機を救えないという結果を生み出してしまったのだ。アリスと王女の逆転、ジェシカと赤ん坊の逆転にポストモダン性を見る事が出来るかも知れないし、この猫の意義とは、ジェシカの感情を具象化し、救う存在であると共に、現代における家族関係の歪みを提示するものであったと言えるかもしれない。あるいは赤ん坊の死という事はアメリカ人の未来感のなさ、また、家族間の寄る辺のなさを象徴しているとも解釈することもできよう。

2

“Where Are You Going, Where Have You Been?” においても、妄念に追い詰められていく主人公が描き出されているようだ。“Where Are You Going, Where Have You Been?” に関して、オーツ自身の解説では、ティーンエイジャーの普通か良家の子女が20代の男性に、誘惑されて、誘拐された後殺害さ

れたThe Pied Piper of Tucsonの事件に関心を持ったことが、発端となり、最初は“Death and the Maiden”というタイトルだったと語られている。⁹

『鏡の国のアリス』を下敷きに解釈する、①Marilyn C. Wesleyによると、鏡に映した自分に見とれている主人公コニー（Connie）こそ、brutalな男性世界へのイニシエーション（入門儀式）に先立つ行動だとする。¹⁰ 同様に②Jacques Lacanは、この『鏡面』（mirror-phase）の前に立つことは、重大な出来事として、男性の象徴的な秩序への導入（挿入＝insertion）だと指摘する。¹¹ ③またJoyce M. Wegaはコニーとアーノルド（Arnold）の出会いでは、アーノルドを、現像を作り出しているだけなのに夢を実現させる一見友人顔をして変身をする、メフィストフェレスフェス（中世ヨーロッパの悪魔、特にゲーテ作のファウストの中の悪魔）ゆえに、現代版人間対悪魔の戦いなのだと、解釈する論評もある。¹²

いずれにしても、“Where Are You Going, Where Have You Been?”の主人公コニーの行き先は別の世界、大人の世界そして待っているのは死の世界である。なのに、敢えて鏡の国に入っていくコニーは、Friedmanによると、オーツは「現実の世界、あるいは現実世界を支配する組織の中には、主人公の切望を満足させてくれるようなものは、何もない。この事実から逃れるためには個人の存在の仮の文化的な限界を超越する別世界を創造してしまう」のだ。¹³

故に、物事を決定する場合に、ある概念に奪われて、といった意味で、they cannot think of anything else.¹⁴ 心がそこになくて、obsessionに魂を譲り渡し、行動に移してしまうように見える。たとえば、コニーと友達が、夜のプラザに来る時、エディに誘われる。その時のコニーの顔の輝きはher face gleaming with a joy that had nothing to do with Eddie or even this place; it might have been the music.¹⁵ まるで音楽に酔ったような状態ではないだろうか。また急かせるような執拗な音楽のリズムに縛呪されたように、男の顔が一つの観念となっていく。次に家の中にいるConnieにArnoldが執拗に出てくるように誘われて、Arnoldに従おうとする部分でShe thought for the first time in her life that it was nothing that was hers, that belonged to her, but just a pounding, living thing inside her body that wasn't really hers either.¹⁶ と考えるのである。

素性も分からない初めて訪ねてきた男性に、行き先も分らず従って行く決

心をした時の文章である。ただ、男性のいわばincantation（呪文、まじない、繰り返しの言葉）だけで、ドアを開けて着いて行く、もうそれ以外考えられなくなるところが問題なのだ。そして、She put out her hand against the screen. She watched herself push the door slowly open as if she were back safe somewhere in *the other doorway*, watching this body and this head of long hair moving out into the sunlight where Arnold Friend waited.（イタリック、筆者）と別のドア、つまり『鏡の国』へのドアを開けるのだ。

結

本論において検討したように、“Nobody Knows My Name”と“Where Are You Going, Where Have You Been?”におけるobsessionの概念は、主人公が選択肢がないものと自らを追い詰めてしまう結果であることが一因であると思われる。それが、客観的に見た場合、ミステリーとSF的な雰囲気となっているのではないか。追い詰められる体質と追い詰めていく可能性を持つ現実があることをオーツは描き出したようだ。『不思議の国のアリス』を遠い背景に援用しながら、幸福とは逆転のさかさまの世界を作り出してしまわざるを得ない悲劇がオーツの締めくくりである。

注

1. 早川浩著『ミステリマガジン』’93年11月号（早川書房、1993年）、p.21.
2. Oxford Advanced Learner’s Dictionary Oxford University Press 2000による定義
3. Kenneth Womack. *Postwar Academic Fiction Satire, Ethics, Community* Palgrave London 2002 p.61.
4. K. Womack p.61.
5. Joyce Carol Oates. *The Faith of a Writer Life, Craft, Art.* New York: HarperCollins Publishing Inc., 2003 p.13. に基づく。

6. J. C. Oates. p.38.
7. J. C. Oates. pp.13-14.
8. Ellen Datlow ed., *Twists of The Tale An Anthology of Cat Horror* New York: Dell Publishing 1996 p.265. 以下本文中の本書からの引用には、ページ数のみを記す。
9. Joyce Carol Oates *Woman Writer* Dutton New York 1988 p.317.
10. Marilyn C. Wesley *Refusal and Transgression in Joyce Carol Oates' Fiction* Greenwood Press Westport · Connecticut · London p.42.
11. Jacques Lacan “The Meaning of the Phallus.” *Feminine Sexuality: Jacques Lacan and the “école freudienne”* ed. Juliet Mitchell and Jacqueline Rose. Trans. Jacqueline Rose. New York: Norton, 1985. pp.74-85.
12. Joyce M. Wegs, “Don’t You Know Who I Am?” : The Grotesque in Oates’s ‘Where Are You Going, Where Have You Been?’ *Journal of Narrative Technique*, 5 (January 1975), 64-72.
13. Ellen G. Friedman. *Joyce Carol Oates* Frederick Ungar Publishing Co.,Inc. 1980 p.13.
14. K. Womack p.61.
15. Sandra M Gilbert / Susan Gubar *The Norton Anthology of Literature by Women The Tradition in English* W W Norton&Company New York London 1985. p.2076.
16. Sandra M Gilbert / Susan Gubar p.2085.
17. Ibid., p.2085.

参考文献

Lewis Carroll *Alice’s Adventures in Wonderland & Through the Looking-Glass*
 A Signet Classic 2000

稲葉振一郎 『モダンのクールダウン』 東京：NTT出版株式会社、2006年